

ふくしまイレブンとは、福島県の多彩な農林水産物を代表する生産量が全国上位の11品目です。毎月おいしいアスリートを紹介します。

ふくしまイレブン



バックナンバーが読める!
HPはこちら!!!

七色物語

ふくしまイレブン 背番号7番 りんどう

風がだいぶ冷たくなった。

ボクはゆつくり目をあけて、一面に青く染まった雲ひとつない青空を眺めた。ボクはこの土手で、草むらに大の字になって昼寝をする。やわらかい日差しの中で、ひんやりとしたやさしい風が、冬がそこまで来ていることを知らせている。気持ちのいい、屋下がり。

再びまぶたが下りてきて、うつうつとと睡魔に飲み込まれそうな瞬間、子供の泣き声が聞こえた。

「ほらほら、泣かないの。」

目をやると、母親が泣きじゃくる子どもを抱き上げていた。子どもの足元には、壊れた機関車が落ちている。どうやら、遊んでいるうちに壊れてしまったらしい。

「きかんちゃーきかんちゃー!」
顔を真っ赤にして、抱きかかえられた子どもはわんわんと泣き続けた。母親も途方に暮れている。ボクは、その子どもをじつと見つめていた。と、その拍子に子どもと目が合った。大丈夫、泣かないで。

子どもは、ボクの顔をじつと見つめたかと思うと、泣くのをやめて空を見上げた。空には、大きな虹がかかっている。

「にじーにじー!」

突然泣き止んだ子どもに驚く間もなく、大きな虹に目をとられた母親は、「本当だ!すごいね!」などとはしゃいでいる。本当に、大きな、美しい虹だった。

ここだけの話だけど、こういうことがよくある。こういうことっていつかは、泣いた子どもが泣き止むとか、そういうこと。ただし、百発百中というわけじゃない。

たとえば、あれはいつだったろうか。去年の今頃だと思っ。珍しく雨が多くて、お日様を拝めない日が何日も続いていた。そのせいか、ボクは長い間風邪をひきずっていた。日直が

あたったある日、日誌を先生に出しに行くと、教室に戻ったんだ。そこに、クラスの中ではおとなしい方の城田くんが、電気の消えた教室の片隅に一人でぼつんと立っていた。

「城田くん、下校時刻過ぎてるよ。」

暗い教室に一人でいるなんて、なんだか嫌な予感がした。ボクはだるい体をひきずりながら、城田くんに近寄って肩をたたいた。

「もう帰ろう。」

城田くんは、振り返らなかった。そして、ボクは彼の手に握られているぐつぐつと濡れた上履きに気づいた。にじんだ文字で、「城田」と書かれている。ことはを失ったボクより先に、城田くんが言った。

「部活から帰って履き替えようとしたら...。」

城田くんの顔は、悲しみと困惑にゆがんでいた。

「上履き...もう履けない。」

みるみるうちに、城田くんの目から涙があふれた。口をへの字にして、声を押し殺してウ、ウ、と泣いていた。

ボクはいつものように、城田くんを見つめた。そして、あの力が出るのを待っていた。大丈夫、泣かないで、と。でも、いつまでも城田くんは泣き止まなかった。そして、だんだんと目の前の景色がぐにやぐにやになってきて、気づくとボクまでぼろぼろと泣いていたんだ。

ボクと城田くんは、暗い教室で、いつまでも泣いていた。

「よかったねー、虹が見られて。」
母親と子どもは、にじにこと土手沿いを歩いていく。ボクはそれを、いつまでも見送る。

城田くんは、今どうしていると思う?実は、あの時の上履きを、今でも誇らしげに履いている。吹奏楽の部活も続けていて、今では部長でバリバリやってるんだ。

ボクはあの日、例の力を発揮できなかったけど、城田くんから大きなことを教わった。悲しみを乗り越えた先には、いつも大きな虹がかかるということ。時に涙を流しても、何も心配することないんだってことを。

ボクはやれやれ、と腰を上げた。そして一言、今日も結局、サッカーの練習をサボるわけにはいかないな、とつぶやいて、土手を後にした。

「ふくしまほのか」「ふくしまかれん」など、多くのひんしゅがあるりんどうは、梅雨の合間から雪の間際まで長い間楽しめる花。雨上がりなどに、日差しを浴びて開花する姿は幻想的です。花言葉は”悲しんでいるあなたを愛する。”りんどうの凛とした美しさは人々が心慰められるからでしょうか。

りんどう

